

英一たちが振り返り何も追ってこないことを確かめたのはそれから如何程時間が経つてのことだろうか。既に辺りは明るくなつてはいた。周囲が視認に支障ない程度の明るさに過ぎないものとは云え、それで彼らは自分たちに朝がやって来ていたことを理解した。英一は息も絶え絶えの小春を、次に少し前で肩で息をしている奏美、最後にへたり込んでいる由海を見た。少なくともこの四人は無事らしい。

「ごほっ、ごほっ……」

「大丈夫か、名賀搗さん」

「え、ええ、酷い時はこんなものじゃないから……ごほっ」

小春の喘息は激しい運動にとんと向かないと云うのに、ただ必死で逃げるしかなかったことは英一に苦々しい心境を抱かせた。俺が何とかしなくちゃいけない、そう思いながら小春の肩を支え、落着くのを待った。

「ありがとうございます。葦杜先輩」

小春は漸く落ち着いたらしく、疲れた様に地面に座り込む。多少息が整った奏美が歩み寄って囁いた。

「小春ちゃんを助けてくれてありがとう。格好良かったよ」

「え、いや……」

につこりと奏美は微笑んで、それから由海の傍に赴いてその様子を質した。四人は落ち着いたところで今後どうするかを話した。多分自分たちは西側へ逃げた筈だからこのまま地面の凹み、干上がった川らしきものを探すかそれとも一旦戻って様子を見るか。他の三人が決めて欲しいように英一を見やるので、まずは他の皆が心配だからと様子を見て来ると言った。三人は一旦待ち、英一が一人で内心恐る恐る引き返したのだが彼が見たのは大穴だった。

「何だ、これ……」

異様な、真つ直ぐ抉り取られたような大穴がそこにあってバスの残骸も何もなく穴の底は窺い知れなかった。飛び込んでそれこそ助かるまい闇だけがその底には広がっている。彼は訳が分からないと云う心境で踵を返そうとして、見知った声に呼び掛けられた。

「英一、無事だったの！」

月子が草木を掻き分けて彼のところへと駆け寄って来た。こんな時ばかりは彼も素直にその再会を喜んだ。彼女もどうやら事前の班と共に東側へと一旦逃げ、この場の状況を確認しに戻ったらしい。

「こうなったら一旦合流した方が良いか？」

「うーんどうだろう、私たちの班とあんたの班のメンバー以外どうなったか分からないからどうにか探した方がいいとは思うんだけど、その場合まとまっていればむしろ探せる範囲が狭まると思うから」

「でも城の東側には湖が、水場があるだろう？」

「そうだと思うけど、飲める水かどうかは行って見ないと分からないし。西側にも何かあるかもしれないからやっぱり誰かには向かって欲しいと思うのよね」

「そうか……」

「取り合えず、合流場所だけ決めましょ。分かり易くあの城がいいと思う」

「城つつつても結構でかいからどこら辺と云うところまで決めないと迷子になっちゃうと思う。……ああ云う建物ならきつと正門みたいながあるんじゃないかな。多分山が塞いでいる北側じゃなくその反対側の南に」

「そうね、じゃ、城の東西を探索したら一旦正門を目指してそこで合流しましょ」

「ああ」

二人はそうして互いの無事を祈念しつつ別れ、自分たちを待つ仲間の元へと帰った。英一の報告は三人に暗い表情をさせたが、少なくとも反対側で月子たちが健在らしいことは幾分元氣付けられた。一行は道なき道を北上し進む。森は静かで風は凜いでいた。不気味な程に。

英一たちは開けた場所に出た。そこには明らかに建物があった。大変に古びた木造の小屋と辺りを切り開いたらしい平地、またその傍らに大地の凹みを。英一たちは二手に分かれて小屋と凹みを調べた。英一は由海を(当人の希望により)伴って凹みの側を慎重に降り、奏美は小春と共に小屋を。凹みは月子の見立て通りと云うべきか、先まで見通せる長さで続いておりその視界の端に城壁らしきものが目に付いた。そう遠い距離ではなさそうである。これなら目的地まで迷うことはなさそうだと英一は少し安心した。

「あの……葦杜君……」

傍らの由海がどこか周囲を警戒しながらそう呼び掛ける。一体何だろうと英一は思っただけで彼女を見た。由海の瞳は俄かに緊張が見られたがその理由に英一は思い当たるところがなかった。由海は続けて言う。

「ええとね、その……いい機会に、二人つきりに、なれたから。だから、伝えておきたいことがあってね……」

そんな風に言いながら由海はゆっくりと彼に近付き始める。二人の間に沈黙が流れ、ただ鼓動の音だけが長く執拗に聞かれた。英一はこんな時にどうも相手の含意を洞察するのに遅れ、向こうがすぐ傍のところまで近付くのを許してしまった。顔と顔がすぐそこと云うところに至って由海は真っ赤になりながら暫く英一を見ていたのだが、何かの踏ん切りが付かない様に立ち止まっていたところ、唐突に領いて自分の上着に手を掛け始めた。これにはさしもの英一も驚き、狼狽えながら言う。

「え、いや、楚さん何してるの!？」

「え、ええと、だって、どう言えばいいか分からなくなったから、ああそうじゃなくて……」

何とも滑稽味を感じるやり取りをしながら由海は上着を半ばまで脱ぎ終えていた。胸囲を覆う下着が垣間見えて英一はどきりとし、慌てて視線を逸らす。逸らされたことに気付いた由海はまたこんなことを言う。

「あ、あ、ごめんね葦杜君、見ちゃ駄目ってことはなくて、その、むしろ、見てもらわないとって言うか……」

「いや、いや、そもそも何でこんなことをこんなところでしているんですか!？」

「え、あ、ああ、それは、ええと……」

要領の悪いしどろもどろとしたやり取りが繰り広げられた。どちらも間拔けな程初心な対応に終始したものだったので状況が進まない。どうすればいいんだ、と内心で英一が叫びたい思いを抱いたのだがそこへ別の、鋭い悲鳴が響き渡る。

「キャー……ッ!!」

それは二人をいわば正氣に戻す効果があった。その発生源は小屋の側であり些か遠く、声の主は奏美と小春で間違いがなかった。英一の脳内に正常な判断が戻り、慌てた調子で彼は由海の傍らを擦り抜けて彼は言う。

「二人の声だ! お、俺、様子見てきます!」

それを止めることは彼女にも流石に不可能だった。素早く斜面を駆け上がる彼をどこか呆気に取られながら見送った由海はその姿が視界から消えた後自分の上半身を半脱ぎにした間拔けな恰好に認知が至り、急いで着衣を戻し始めた。内心では己の胡乱な遣り口を罵りたくて仕方がないものだった。

英一が小屋に駆け込んで見たのは怯える二人で、その視線の先には一匹の虫があった。茶褐色に伸びた触覚、ゴキブリである。英一が現れるとゴキブリは直ぐに走り出して中にある壊れた机の下に姿を消した。

「ああ、何だゴキブリか」

「びびび、びっくりしたんだよ！　こんなのがいるなんて思ってたからあ……！」

奏美はそう言って英一に抱き着いた。小柄だが豊満な胸囲を無警戒に押し付けて来るこの少女に彼は実に目のやり場に困る思いを抱きながら小春を見たのだが、当の小春も怯えた表情で英一を見上げて次にその片腕を取ってしがみ付く。これじゃ委員長の言う通りハーレム野郎じゃないか。彼は状況にどきどきしつつも呆れ、二人を宥めて状況を訊いた。小屋に入る前に周囲を眺め回して二人が感じたのは、ここは元々牧場だったのではないかと云うことだった。腐った柵さくが一带のあちこちに残されており、遠くにも幾つか小屋らしきものの姿が見える。尤も、ここにあるものを除いては倒壊してしまっているかにも思われたのだが……。ただ二人はそんな牧場の敷地内で気になるものに目を付けていた。少し離れるが故に二人だけで赴くのは危ないと思つて、まずこちらの小屋の様子を窺おうとした次第らしい。

「あれが何なのかちよつと遠目では分からなくて……。ごめんね英一くん」

「奏美が謝ることじゃないよ。それから……。俺がこの小屋を調べればいいのかな」

「ごめんなさい、お願いしてもいいでしょうか？」

小春と奏美に頼まれ、英一は開かれたままの扉から再び小屋の内側を瞥見する。古びていることは違いない木造家屋であり、変に壁でも叩いたらそのまま倒壊しかねないのではないかと思われた。英一は奏美がライトを持っていたが故にこれを借りて点け、内部を照らす。埃を被っているらしい内部には柵が幾つかあつてそこには用途不明の薬液らしきものを収めた瓶が何本か並んでいる。しかしその経年の程を思うと中身を確認しようとは思われなかった。ラベルが貼られてはいるが彼には見覚えの無い文字で書かれており読めそうにない。小屋の中には他に簡単な作業所と思しき設備、壊れた机や椅子等が遺のこされている。そしてその奥に半壊した木製の扉。危険だがこの奥を調べてみるべきか……。英一がそう考えたところで後ろから足音が近づく。由海のものだった。

「ごめんなさい、遅くなってしまつて」

由海の態度は平素に戻っていた。あれは何だったのだろうかと雄一は思い、彼女の下着姿を一瞬思い出して赤面した。その顔を見た奏美と小春が首を傾げ、彼は慌てて顔を逸らしつつ由海を労う。由海はそれを見て少しだけ同じくどこか恥ずかしそうにしつつも安堵の笑みを浮かべた。四人は奥の扉を調べるべきか話し合った。

「万が一小屋が崩れたら私たちだけじゃどうしようもないよ。止めておいた方がいいと思う」

「そうだけど、何かここらについて分かりそうな手掛かりの一つもあるかもしれない」

「でもその為に葦杜先輩一人を危険に晒すなんて嫌です。みんなが入ったらいいよ崩れた時に共倒れになってしまうすし」

「同感です。こう云ういつ崩れるか分からない建物はなるべく近付かない方が身の為ですよ」

こんな風に女性陣の大反対に遇つたので英一は扉の奥を探ることを諦めた。まあそれはそれで尤もだろうな、と彼は得心する。ただ何と無しの未練を覚えたらしい彼はこの場を離れる前にもう一度だけ小屋を覗き込んだ。ゴキブリが潜んでいること以外変哲のない廃屋。そんな事実を確認した中で彼は奥の扉をまず見た。一瞬だけ彼は扉の前に立った自分が誰とも知れぬ手に掴まれて奥へ引き摺ずり込まれ、そのまま颯り殺しにされるのではないかと妙な想像を思い抱いた。渋い表情をして視線を落とした彼はそこで何か光るものが床に落ちていることに気付く。ライトでそれを照らして見えたのは、鋸であった。周りが心配する中、慎重に足を踏み入れた英一はそつと鋸の刃の部分に手を触れ、その先を見る。暗闇の内は動物の死骸らしきものが見えて彼はぎくりとしたが、気持ち落ち着かせて

ゆっくりと手を引き鋸を引き寄せた。床を這う音を立てて彼の元へ舞い込んだそれは部分部分が赤錆びていたが、ある程度は元々の用途に耐えそうに思われた。或いはその場凌ぎではあれ武器にもなりそうだと。彼は速やかに小屋から身を引いた。つくづくいつ崩れるとも知れぬと思うとあまり愉快な気分にはなれなかった。

この開けた空間で四人が固まっていたとしてもしょうがないし、他の面々が迷い込んで来るかもしれないと英一が指摘すると奏美が、次いで小春がこれに同意した。そこで牧場の小屋付近に見張りを立てると云うことになったが、誰がやると云う点で意見がまとまらずジャンケンをしたところ由海が負けたことで彼女がそこで待つこととなった。

「やっぱり心細いですから、なるべく早く帰って来て下さいね」

由海にこう言われながら三人は牧場の奥へ歩みを進め、奏美と小春が目にした物体を調査に赴いた。遠目で見た英一は、あれは自動車ではなからうかと思ったのだが近付くにつれその判断は確信に変わっていった。

三人が見たその自動車はやはり年月が経って埃と泥、また枯葉や折れた小枝などに塗れたもので自分たちと同じ遭難者の様子を思わせた。くぐもったガラスの下はこのままでは窺い知り難い。しかしまさかこんな車内に誰かいると云うこともあるまいと思われ、英一は奏美が向ける視線に一つ頷いて左側の後部座席のドアに手を掛けた。鍵が掛かっているのではとも思ったが、ドアは音を立ててすんなり開けてくれそうだった。ゆっくりと彼はこれを開き、三人は中身を確認する。

「ひっ……」

中には運転席に朽ちた屍また後部座席も人の死体が転がっていた。葬式以外で死体など見たことのない三人には大変刺激の強いもので、奏美は直ぐに顔を背けて込み上げる嘔吐感に耐えていた。小春も少しの間顔を顰めてこれを見ていたがやがて背を向けた。英一は二人を労わりながらも改めて車内を覗き込む。彼は無残な屍を交互に見やっ、一つの特徴に気付いた。運転席に座っている者のそれはほぼ白骨化したもののなのに対し後部座席に横たわっているのは茶褐色に変色しており、これは同乗者の死に様としては少し不自然に思われた。彼は後部座席の者は後になってこの車に逃げ込み、そしてそのままここで死んだのではないかと考えた。車内はやはりボロボロであったが、よく見ると後部座席の側は血糊の跡らしき乾いた液体の広がった痕跡が見られ、また死体は左足を抑える様にして倒れていることから重傷を負ったままにこの車に逃げ込み、そこで力尽きたのではないかと思われた。

「イヤダ……」

妙な声が三人に聞かれた。英一は振り返って奏美と小春を見た。二人は動転した目をしながら英一を見て自分ではないと訴えていた。まさか……。彼がそう思った時、その右腕を何者かが掴んだ。英一が驚いて車内に視線を戻すと、死体が身を起こしてその左手で彼の腕を掴んでいたのだ！

「ヒトリデハ……シニタク……アアアアアアッ……」

万力かとも思われる力で英一は引っ張られた。死体は彼を締め上げる。英一は身の危険を感じ、無我夢中でこれに抵抗したが相手の力に及んでいる様には思われない。一瞬毎に命の危険が増しているのを感じた彼は、今度は足から引っ張られた。奏美と小春が無我夢中で英一の脚を掴み、死体諸共車外へと引き摺り出したのだ。外へ転がされた後英一と死体は転げ回って組み合いが続いたが、奏美が落ちた鋸を拾って死体目掛けて横向きに振り下ろした。鋸は運良く死体の頭部に当たり、その頭骨が碎ける音がして潰れた。それと共に英一を縛っていた死体の怪力は失われ、それはただ転がっているだけの存在に戻った。

「た、助かった……奏美、ありがとう」

「ごめんね英一くん、万が一当たっちゃったから……」

「大丈夫、そうはならなかったから」

英一が奏美に助け起こされ、それを見ておろおろしていた小春もどうにか落ち着きを取り戻したらしい。彼女は死体を改めて一瞥する。筋肉も大方朽ち果てているかに見えるそれが一体どの様にすれば大の男を拘束出来るものだろうか。それ以上に死体が動くなど！ 彼女や奏美は内心恐ろしくて堪らなかったが、少なくともこの場のそれは退治出来たのだと思うと僅かに気持ちは落ち着いた。

死体を英一が（余り気乗りはしないが）離れた所へ動かして、三人は改めて車内を見る。運転席のそれは微動だにしていない。暗い車内にそれ以上のものはないかに見えたが、ふと小春が自動車のトラックに興味を惹かれたらしくそちらに視線を向けたので、三人は車の背後に回ってやはりこれを恐る恐る開けた。……中にあったのは誰のものとも知れぬ大きな鞆とやはり古びた酒瓶、それにずた袋があり中には三本のインゴットが入っていた。

「これ、ひよつとして金塊か？」

「実物を見たことがないですから断言は出来ませんけど……かもしれませんね」

外の明かりに照らされたそれは鈍く輝きを放っており何とも奇異な印象を彼らに抱かせたが、差し当たり一本軽く持ってみただけでもそれなりに重たくこんなものを拝借する必要性も感じられなかった。それで残りの酒瓶と鞆を調べた。手提げ式の鞆のファスナーを開くとそこにはカビの為に殆ど朽ち果てたパンらしきものが幾つかビニール詰めされており他には六個程の缶詰、ピクルスらしき瓶詰が二つ、簡単に梱包された一枚の皿と一本のフォーク、そして一丁のオートマチック拳銃があった。

「銃……」

「英一くんは、そりゃ銃なんて持ったことないよね」

「そりゃまあそうだよ。何か正雁先輩はアメリカで少し習ったとか言ってたけど」

「そうなんですか？」

「本人の言うところだし、今この場にいないことを思うと気にしなくていいとは思うよ」

周囲に弾倉らしきものが見つからなかったのを思うとこの拳銃には既に装填済みなのだろうか。英一は二人に注意を促しつつその銃を慎重に手に取り、映画の見様見真似で誰も居ない方向に構えて引き金を引いた。硬い銃声が鳴り響いて奏美と小春は驚いたが、英一が反動でそのまま銃を手放して尻餅を付いてしまったのを見て慌てて彼を助け起こした。英一は映画辺りで見たような両手持ちの構えで引き金を引いたものの、その想像を遥かに超えていた反動に耐えられなかったのである。

「大丈夫？」

「あ、ああ。しかし本物か……」

「両手で持っても韋杜先輩がこんなに吹っ飛ばされるんじゃ、とても私たちじゃ使いこなせませんね」

とは云え、もしかしたら游次郎と合流した時に役に立つかもしれない。三人はそう結論付けてこの拳銃は頂いて行くことに決めた。残るは食糧品だが、パンはカビている以上食えたものではないので置いておくとして三人は缶詰と瓶を調べた。外装はかなり劣化して可読部に乏しいものの、少なくとも缶詰は直近三十年以内に製造されたらしい。と云うことは仮にこの自動車の運転手の持ち物だとするならピクルスの瓶や酒瓶も同様なのであろう。

「食えるのかな」

「うーん、ちょっと怪しいですけど、私たちの持っている食べ物はどう殆どないですから最悪背に腹は代えられないと思います」

「そうだね……あまり食べたいとは思えないけど……」

三人は手分けしてこれらも持つて行くことに決めた。本来なら酒瓶は中身が酒だろうと思うと三人にはまだ早いことも違いなかったが、水さえ満足に手持ちがないことを思えば贅沢は言えなかった。

として劣化するのは遅いと思います」

この様に小春が言うので、重いこれをも諸共持つて行くことになった。三人はその後他の崩れた廃屋も瞥見して回ったがこちらでは目立ったものは見つからなかった。そうして最初の小屋の前まで戻ったのだが、そこに由海の姿が見られなかった。

「どこへ行っただろう……？」

三人は首を傾げ、辺りを見回したがその姿は見られなかった。すると、ここから動くべきかどうかを考えることになる。仮に用を足しにでも行っているのだとしたらここで待っていてやらねば行き違いになって遭難者を増やす格好となるだけだろう。そう考えると暫くこの場で待つべきではないかと云う意見で三人は一致した。スマートフォンで確認する限り時刻は夕方に差し掛かるうとしていた。相変わらずの空模様で時間感覚が判然としないが、空腹感を大分強めていることも確かであった。三人はそれで小屋の壁を背に一旦座り込んで、先程見つけた食糧と自分たちが予め持っていた分とを突き合わせた。

「数枚のビスケットとグミ一袋、ドロップス一缶、それに三分の一が精々のお茶が二本、かあ」

英一は然程菓子を持つてきていなかったたのでペットボトルの茶が残っているだけだった。奏美は友達と談笑する際のおやつに持つてきていたものの余りとしてビスケットやグミがあったが飲み物は既に飲み尽くしている。小春も持つてきていたお菓子は概ね食べて半ばまで減ったドロップスの缶と茶を残すのみ。空腹感を埋め合わせるには圧倒的に足りない。そう思うと缶詰やピクルスの瓶は大変に魅力的に思われた。

「でも楚先輩に見せもしないで手を付けたら少し悪いですよね……」

「そうだな……」

空腹を抱いているとはいえ、仲間への罪悪感を忘れる程彼らはまだ窮乏している感覚を抱いていなかった。かくして三人は菓子類を食べて凌ぐことにした。僅かなビスケットとグミ、飴玉を分け合って食べるのは実にひもじさがあり、またその甘い味わいがひどく身に染みた。

「ところでお茶、俺のを分けた方がいいよな。こんなことになるとは思ってなかったから口付けちゃったやつだけだ」

「そこに贅沢は言えないよ。でも、英一くんが一番頑張ってくれてるから」

「そうです。瀬之川奏美先輩の分は私が分けますから、葦杜先輩は自分の為に飲んでしまっ下さい」

「そうは言ってもな……」

それこそ今後どうなるとも知れないと思うとここで貴重な水を飲み尽くすのは早計にしか思われなかった。酒など口にする齢ではない彼には手に入れた酒瓶の中身を開けるのは出来るだけ避けた方がいいと思っていた。少なくとも酔ってしまったえばその判断断力は鈍るだろう。変なところで酒を含んで前後不覚にでもなったらどうなるか。彼は残っている自分の茶を半分も飲まなかった。

辺りが暗く翳って来たが由海が戻っては来なかった。待つ間代わる代わるに用を足して、風が続く不気味な牧場で彼らは小声で話をしながら待ち続けていた。話は殆ど他愛のない学校や友達との記憶を振り返ることばかりで、それは不安を一時でも忘れる為の方途に他ならなかった。そうしてもう夜闇が辺りを包み込むに至る頃に至って尚由海が戻って来なかった事実は三人に不安を膨ふくらませると共に次への行動を促さざるを得なかった。

「こうなっちまったらこのままここに留まっているのも良くないと思う。月子たちが今どうしているかは分からないけど、何事もないままなら多分あの城の正面の門を目指している筈だからあまり俺たちがのんびりここで時間を潰していたらあっちを待たせることになる」

「うん……わたしたちがここに留まっている間誰も通り掛かったりしなかったと思うと、他のみんなもこの牧場の近くにはいないと思う」

「でもこんな夜に動くべきでしょうか？ ライトが一応あるとはいえ電池がいつまで持つかは分からないですし、何より夜は視界が利きません」

「確かに……ただ、俺たちには今のところ落ち着いて一休み出来る場所もないままだ。この開けた場所です手にみんな寝てしまつて、野犬の群れにでも襲われたらヤバイと思う」

「それもそうですね……」

「ちよつと怖いけど、英一くんが確かめた川の方から進む……で、いいのかな」

「ああ」

こうなるなら明るい内に移動すべきだったのは違いないが、後の祭りだ。英一は少し後悔しつつも二人を連れて干上がった川へと赴いた。念の為英一は一度降りた辺りをライトで入念に照らしたのだが、由海の姿はなかった。

「ん？」

照らされた先に何か落ちていると思い英一は二人を連れてそれを拾い上げる。マツチの箱だった。見覚えのある由海のそれ。三人は顔を見合わせた。不安が彼らに差し込んだが、それに囚われている場合ではないことも違いなかった。

「多分何かの理由で楚さんはこっちに降りて来たんだ。その時何かの拍子に落としてしまったんだと思う」

「だとしたら楚先輩、明かりも持っていないってことですよ」

「そうなるな……無事でいてくれるといいんだが」

くよくよしていても始まらぬ。三人は北上を開始しようとした。――不意に、彼らの後ろから足音が聞こえた。三人は自動車を調べた時の経験故か下手なものを呼び寄せたくないと思って大声を上げることに消極的でいたものだ。そもそも声を上げたからと云って近くに誰がいるとも知れない。下手な肉食動物、或いは異形の存在などを呼び寄せては目も当てられぬ。三人は何となくそれで意思統一が出来ていた。英一は足音の側へ明かりを向けた。一瞬、由海が戻って来たことを期待して。

「なに、あれ」

照らされた先にいたのは真っ黒な男だった。身長2メートルにも達するかに見える真っ黒な男。その姿は関節までラバーで覆い尽くされたマネキン人形を思わせた。頭部は髪の毛一つ持たず眼窩の無い、凹凸だけを有した顔。どこからこんなものが現れたのだろうと英一は思った。そして、彼は本能的に危険を感じた。

「走れ！」

英一がそう言ったことで催眠から醒めた様に奏美と小春は強張った表情で大声を上げ、一目散に北へと駆け出した。英一はその後に続いて走り出す。彼が振り返るとその真っ黒な男もまたゆるりと走り出して三人を追い始めていた。

隠れる場所も何もない一本道を三人は無我夢中に駆けた。その後ろから不気味な足音が続いて、少しずつ彼我の距離が縮まりつつあるのを三人は音と気配で感じていた。小春が息を切らし始めていた。奏美がその前を走って彼女の手を握って先導する。英一は最後尾を守ってこの黒い男が二人に襲い掛かるならこれの盾となるつもりでいた。殆ど必死でもその程度を考えられる位には彼は二人を預かっている云う責任を感じていた。どこまで走ったか、遂に小春が躓いて倒れた。その為に奏美も足を止めてしまう。英一はいよいよ振り返って男に鋸を向け、何としても食い止めようと身構える。男は突っ込んで来る。だがここへ来て英一と黒い男との間に爆光が閃いた。その大きな音は静まり返っていた森を揺るがすかに思われる程だった。視界を奪われていた英一の目が慣れた時彼が見たのは、大穴が開いている眼前と消えた男の姿だった。

「たす……かった、のか？」

英一はへたり込みながらも後ろの二人を見た。荒い呼吸で咳を繰り返す小春を奏美が介抱している。こんなにも走らされて小春が長く持つとは思われなかった。どう云う訳だかあの不気味な男から逃れたらしい今の内に、どこか身を隠せる場所を探さなければ。彼は預かったままのライトで辺りを照らした。南東側を照らした時、彼は人影が視界に映ったのを見た。それはほんの子供の姿をしていた。こんなところに小さな子供が？　だが何より信じ難かったのは、一瞬だけ垣間見たその顔は記憶の奥底に仕舞われていた者の顔そっくりだったと云うことだった。

「翼……？」

まるで幻でも見たかのように瞬きをした次の瞬間には子供の姿は消えていた。英一には何が何だかさっぱり分からないと云う心境であったが、今はそれどころではないと思い小春の元へ駆け寄った。

「お前ら、まさか生きてここにいるのか！？」

見知らぬ声が上から三人に飛んで、彼らは声の主を探した。こっちだ、とその男の声がし、明かりが灯された。二十歳過ぎぐらいの若い男がランタンを持って立っていた。